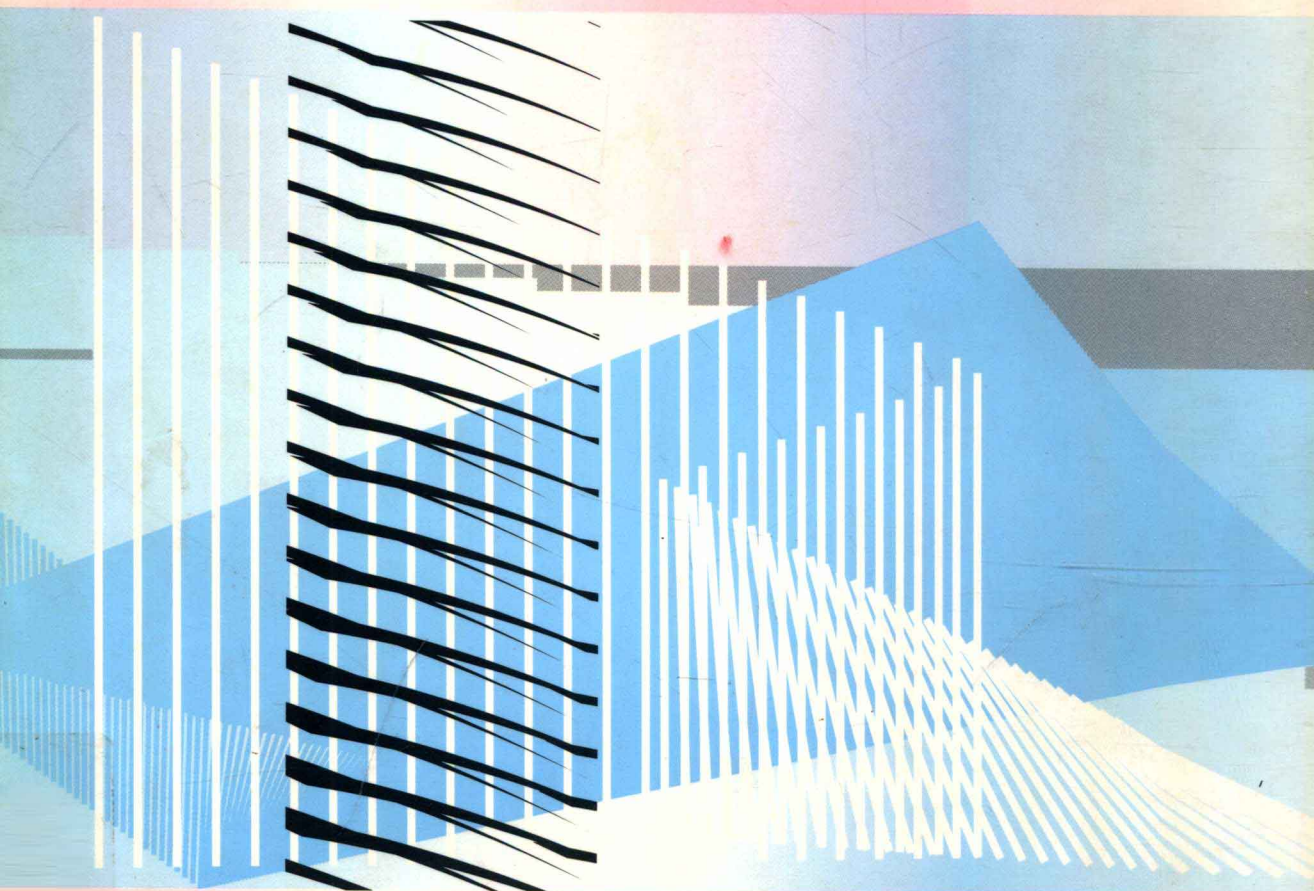


コミュニケーションのための 日本語・音声表現

加瀬 次男 著



学文社

Japanese Colloquial Expressions

コミュニケーションのための
日本語・音声表現

加瀬 次男



学 文 社

[著者紹介]

加瀬 次男

1959年3月 早稲田大学教育学部英語英文学科卒業
1959年4月 NHK 編成局アナウンサーとなる。

NHK アナウンサーとして「浅間山荘事件」や「全日空機墜落事故」などの中継。大河ドラマ『風と雲と虹と』の語り。ラジオニュースのキャスター。テレビ「きょうの健康」の司会。「ラジオ文芸館」の企画・制作などを担当。日本音声学会会員。

現在、フェリス女学院大学、東京家政学院大学、足利工業大学、産能短期大学、足利短期大学で「日本語・音声表現」「日本語音声学」の講座を担当。NHK文化センター、朝日カルチャーセンターで「朗読の楽しみ」「実践音声表現演習」を担当。

著書に『アナウンサーたちの70年』『もうひとつの放送史』『ロシア語版日本語講座』などがある。



コミュニケーションのための 日本語・音声表現

2001年4月20日 第1版第1刷発行

著者 加瀬 次男

発行者 田中 千津子

〒153-0064 東京都下目黒3-6-1

電話 03 (3715) 1501代

FAX 03 (3715) 2012

<http://www.gakubunsha.com>

発行所 養学文社

©Tsugio Kase 2001

印刷所 新灯印刷

乱丁・落丁の場合は本社でお取替えます

定価はカバー、売上カードに表示

ISBN-7620-1034-0

はじめに

いまは、情報化の時代とも、国際化の時代ともいわれます。この情報化国際化の時代にあつて、ますます重要視されてきているのが、「ことばによるコミュニケーション」です。多様化する社会にあつて、人と人との「ことばによるコミュニケーション」の大切さがわかってきました。自己表現力やコミュニケーション能力の必要性が多方面から指摘されるようになりました。明確に自己主張ができ、的確に情報伝達ができ、それらを裏付けるしっかりとした論拠を持ち、誰からも理解され、受け入れてもらえるような言語文化への志向が強まっています。

産業界からは、企業活動において的確な情報処理や問題解決能力としての「話しことばによるコミュニケーション」は不可欠であり、「思考力、表現力の涵養と音声表現を重視した教育を」という強い要請が出されています。

また教育界からも、これからの社会においては、知識・情報を単に取得するだけでなく、それを適切に駆使し、自分の頭で考え、創造し、表現する能力が一層重視されなければならないということが指摘され、「話すこと、聞くことに重点を置き、きちんとしたわかりやすいことばで的確に伝達することができるようにする必要がある」と、音声言語の重視を指摘する意見も多く出されています。

ふり返って、私たちは、これまで日本語についてどれほどの言語教育を受けてきたのでしょうか。残念ながらわが国では、これまで学校教育において、日本語の「話し・聞く」という教育はおろそかにされてきました。たしかに国語の授業はありましたが、それは、書きことばによる「読み・書き」を主体とするもので、話しことばによる表現、音声表現の学習ではありませんでした。高校の国語の授業ですら、読解と文学重視の傾向が強く、「話しことば」の教育は行われていませんでした。

外国などでは、イギリスでもフランスでも、小学生のころから「話しことば」の教育が行われています。正しい英語、正しいフランス語が話せることが、その人のステイタスと考えられているほどです。小学校に入ってまずやることは、自分で見たままを話すことから始めて、自分の考えを話すということを日常生活の中に取り入れた教育が行われています。もちろん、友だち同士と交わすことば遣いとは違います。改まったときに人前で話すことを意識した公的日常語が用いられます。彼らはそこで、「話しことばによるコミュニケーション」とはどんなもののなのかを体験的に身に付けていきます。

わが国では、十数年前から、小中高校に音声教育をということがいわれ始め、文部省(現在の文部科学省)も平成4年に、小学校を手始めに中学、高校と学習指導要領を改定して、話しことばや現代語を前面に押し出した国語教育を始めました。

しかし、この「話しことば」の指導は明治以来初めての試みですから、教育の現場では少なからず戸惑いがあります。教師自身が「話しことば」や「音声表現」の教育を受けていません

し、教材や資料も少なく、指導法も確立したものではありません。いまだ手探り状態にあります。

現場の教師自身の音声表現力をどうつけるかの問題、その養成、指導をどうするか、今後教師として現場に送る人材に対して、大学でどのような教育をしていくか、といったいくつかの大きな問題を抱えたまま今日に至っています。

ところで、私は、NHKでアナウンサーとして、長年、音声表現に取り組み、後進の指導にも当たってきました。放送により、何をいかに話し伝えるか、読んで伝えるか、聴いて伝えるか、取材したものをどのように情報化するかといったことに日常的に取り組んできました。放送による実践と、音声言語に関する研究の蓄積が、「話しことば」や「音声表現」の指導に役立つことができるのではないかと考え、放送を通じて培ってきた長年の経験と実績を、何らかの形で体系化してみようと考えました。

いくつかの大学やカルチャーセンターの教壇に立ってみました。学生や受講者から確かな手応えが返ってきました。実践的なことばの教育に珍しさと興味を覚え、楽しみながら表現力、発表力がついているように思う、といった率直な感想でした。

こうしたことから、日本語の、話しことばや音声教育をどうすすめていくか、そのアプローチの仕方を知り、ことばの基本から実践、応用の場面までをどう学習し指導していったらよいのかを知っていただきたい、それに、多くのみなさんに、ことばについて、日本語について興味を持っていただきたいという強い気持から、本書をまとめるということになったのです。

「ことばとは何か」、「話して伝える」、「読んで伝える」という項目を中心に、日本語の音声表現を考えていきます。論理を説明した理解部分と、実践的に活用できる演習部分とを取り入れています。知識として吸収した理解部分を演習部分で実際にやってみることで、本書の自習、独習によって表現力、発表力を身につけてほしいと思います。演習問題は巻末に解答を載せました。

ことばや日本語に興味を持っている方や朗読に関心のある方には、一般教養書としてお読みいただけます。ビジネス社会で活躍の方、国語教師、日本語教師のみなさん、マスコミ受験を目指す方には実用書として、また大学、専門学校、カルチャーセンターでのテキスト、参考書としても、さらには現役のアナウンサー諸氏にもご活用願えるものと思っております。

本書が出版されるにあたり、筑波大学大学院文芸・言語研究科教授 城生佰太郎氏より、いろいろなご助言を賜り、学文社の三原多津夫氏には編集等で大変お世話になりました。深く感謝申し上げます。

2001年1月

加瀬 次男

目 次

はじめに

第1章 おしゃべりなことば ————— 7

- ① ことばは人間による最大の発明…………… 7
1. 初めに「ことば」ありき—認識と概念 8
 2. ことばはコミュニケーション・イメージのコピー 8
 3. ことばを記号化するソフト 9
- ② 記号としてのことば…………… 10
1. 記号にはどんな働きがあるのか 10
 2. 言語記号の特徴 11
 3. 語と語を結びつける「きまり」 13
 4. ことばのきまりと個々人の発話 14
 5. 言語をとらえる局面 15
 6. ことばは無限に内容表現ができる 15
- ③ ことばとコミュニケーション…………… 16
1. コミュニケーションは文化を創りだす 17
 2. 伝達体系の中のことば 18

第2章 話して伝える ————— 23

- ① 話しことばによる表現…………… 24
1. 話しことばとは 24
 2. 公的日常語を話す 28
 - 〔演習2.1〕挨拶にプラスアルファの言い添え 30
 - 〔演習2.2〕ディスクジョッキーの挨拶 31
- ② 挨拶とことば遣い…………… 32
1. 挨拶が交わされる場面 33
 2. 挨拶ことばの使い方 34
- ③ 人前で話す…………… 38
1. 機会が多い自己紹介 39
 2. 事前の準備を入念に 43
 - 〔演習2.3〕準備メモと自己紹介文の作成 45
- ④ わかりやすく情報を伝える①—説明の仕方…………… 46
1. どう説明したらわかりやすいか 47
 - 〔演習2.4〕1 通学経路の説明 52
 - 〔演習2.5〕2 バリ旅行での注意 55
 - 〔演習2.6〕3 血液型の説明 56

5 わかりやすく情報を伝える②—報告・レポートの仕方 56

1. 報告は結論を先に 57

2. 報告の表現 60

 [演習2.7] ビジネスシーンでの報告 63

3. レポートの表現 63

 [演習2.8] 放送でレポートする 65

6 何を情報化するか 67

1. 1枚の写真が伝えるもの 67

2. 「情報」とは何か 70

3. 映像から何を伝えるか 73

 [演習2.9] 1枚の写真からのレポート（青空に泳ぐ鯉のぼり） 74

 [演習2.10] 1枚の写真からのレポート（稲干し風景） 75

7 情報の掘り起こし 76

1. 新聞記事からの情報のくみ取り 76

 [演習2.11] 新聞のコラムの要約 77

2. 記事内容からの情報化 78

 [演習2.12] 特集記事をもとにレポートする 78

第3章 ビジネス・コミュニケーション 85

1 接遇表現とコミュニケーション 85

1. 家族関係の場合 86

2. ビジネス社会の場合 86

3. 敬語に対する意識 87

4. 敬語の働き 88

5. 敬語の使い方 90

 [演習3.1] れる、られるを使わない尊敬語表現 91

6. 第三者に対する敬語 92

7. 敬語の使用上の注意 92

8. 職場の敬語の要点 93

 [演習3.2] 尊敬語、謙譲語の表現 94

9. 間違いやすい敬語 95

 [演習3.3] 正しい敬語表現 95

10. 敬語の誤りのタイプ 96

 [演習3.4] 間違った敬語を直す 96

11. 気になる言い方 97

12. 「ラ抜き」について 98

2 ことばのもたらす心理的な働き 99

1. 緩衝語（クッションことば）を上手に使う 100

 [演習3.5] 緩衝語を使った表現 101

2. 肯定的な話し方 102

3 ビジネス表現の実践 103

1. ビジネスシーンにおける肯定的な表現 103

2. ビジネスシーンにおける指示、命令の受け方 104

- 3. ビジネスシーンの理解 106
 - [演習3.6] ビジネスシーンのロールプレイング 106
- 4. 話の聞き方 109
- 5. 感じのよい話し方 110

4	面接での自己表現	111
1.	面接に備える	111
2.	面接の実際	113
3.	就職のための四大面接の対応	115
4.	面接の質問項目例	119
5.	具体的な応答例	120
6.	面接をふり返ろう	122
7.	面接審査のチェックポイント	123
8.	面接ワースト5	124
5	会議を成功させる	125
1.	会議にはどんなものがあるか	125
2.	司会者の役割と心得	126
3.	会議の進行段階に応じた司会者の役割	127
4.	会議の進行プランの作成	129

第4章 読んで伝える 133

1	朗読とは何か	134
2	読みの基本	135
3	呼吸法について	137
	[演習4.1] 滑舌練習	138
4	短文を読む	138
1.	文の意味をとらえる	139
2.	意味のまとまりとして読む	140
	[演習4.2] 連城三紀彦『瓦斯灯』から	142
	[演習4.3] 連城三紀彦『宵待草夜情』から	142
3.	話すように読む	142
	[演習4.4] 会話文を話す	144
	[演習4.5] 神吉拓郎『夢のつづき』から	145
5	読みに求められる音声表現要素	145
1.	超分節音(プロソディー)を考える	145
	[演習4.6] アクセント	149
	[演習4.7] アクセントの練習	150
	[演習4.8] 意味内容に合ったプロソディー	152
	[演習4.9] 会話文の中のプロソディー	152
2.	意味の変化によるイメージトレーニング	152
6	読みの手順	154
7	読み手の立場の設定	157

8 読みの演出を考える①	158
1. 読みと文体との関係	158
〔演習4.10〕 叙述文と状況描出文（遠藤周作『深い河』から）	160
2. 告知文を読む	162
〔演習4.11〕 「都民総合美術展への参加作品の募集」	163
〔演習4.12〕 「オーストラリアの旅行案内」	164
3. 叙述文の典型—ニュースを読む	165
〔演習4.13〕 「世界で最も長い岩手・一戸トンネルが貫通」	168
〔演習4.14〕 「オランダで開かれている温暖化防止国際会議」	171
9 読みの演出を考える②	172
1. 読みの速さ・テンポについて	172
〔演習4.15〕 三好達治『雪』	173
〔演習4.16〕 畑正憲『ぼくのくろう』	173
2. 読みの調子	175
3. 作品の内容分析と読みの演出	176
〔演習4.17〕 椋鳩十「大造じいさんとがん」の内容分析と読みの演出	181

第5章 朗読を楽しむ 185

1 文芸作品を読む①	185
1. セリフをどう表現するか	185
2. 場面を生かすのは「間」	188
3. 場面、状況の描出	190
4. 阿刀田高『蜜の匂い』を読む	191
5. 作品から受けとめるイメージを大切に	194
〔演習5.1〕 阿刀田高『蜜の匂い』のイメージ化	195
2 読みの感覚	197
1. 情感のある読み	197
2. 行間を伝える表現感覚	201
3 文芸作品を読む②	205
1. 生き生きとした読み	205
2. 読みと指示表現	207
〔演習5.2〕 志賀直哉『八手の花』で指示表現と読みの検討	208
3. 林真理子『つわぶきの花』を読む	209
4 文芸作品を読む③	216
1. 浅田次郎『ピエタ』を読む	216
5 伝えるのか演じるのか	227

演習問題解答 231

あとがき 241

索引 243

第1章 おしゃべりなことば

赤ちゃんは物心ついたときから、何かを伝えたい気持ちが働くと、顔の表情や指さしなどの行動とともに、何やらことばのようなものを言いながら、両親や家族に向かってものごとを伝えようとします。このとき、赤ちゃんは、自分ではことばを話すことができなくても、ことばの存在については、相当に意識しているものです。絵本の自動車の絵を指さして、「ドーシャ!」と言ったりしますと、そばで母親がそれに応えて「そう、ジドウシャね」と言うのを聞いて、何とか「ジドウシャ」と言おうと、口真似に一生懸命になります。赤ちゃんがことばの存在を意識していることがわかります。

ことばとのかかわりは、人間が生まれたときからもう始まっているといわれます。では、その「ことば」とは何なんでしょうか、どのような特性があり、それを人間はどのように取り入れていったのでしょうか。

1 ことばは人間による最大の発明

人間の文化の歴史の中で、ことばは最も大きな発明といってよいでしょう。ことばは思いや考えを他の人に伝える主要な道具、つまりコミュニケーションの道具としての基本的な役割を担っています。

人が意志や感情、知識、情報を交換しあう過程で、最も効率のよい伝達手段はことばです。もちろん身振りや実物を指し示すなどの行為によっても、ある程度まではコミュニケーションを行うことはできますが、どうしても「実物が今ここにある」「そのことが今起きている」といった状況にあるときの伝達に限られます。「今ここにあるもの」から離れて、ものを考え、表現しようとするとき、ことばなしにはコミュニケーションはできません。人がことばを発明し、自分のまわりの「もの、こと」に名前を付け始めたとき、今、目の前のあのこと・このこと、昨日あったあのこと・このこと、さらには明日予定されているあのこと・このことにも名前がつけられます。ことばによって名前をつけ伝達しようとすることは、「今ここ」に限定されていた状況からとき放たれて、伝達しようとする内容は時制を越えたことにまで広げることができるようになったのです。

人間は過去や未来について、また発話している場所以外の所について話をすることができます。ことばの持つ特性です。この特性によって、人間は物語を創作したり、将来ありえる世界を語ったりすることができるのです。

1. 初めに「ことば」ありき — 認識と概念

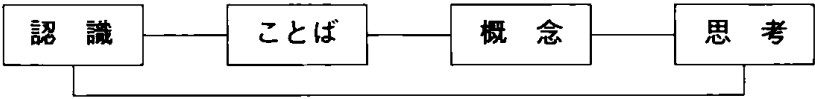
自分の身のまわりの「もの、こと」に名前を付けるということを考えてみましょう。それは、連続して流れている時間や、連続して広がっている空間、そこに無数にころがっているものを、その連続の中から、1つを取りだして、他との違いを意識し、識別することから始まります。他と違う何らかの意味を切り取るのに必要なことは、他と何が違うのかを認識しなければなりません。他と区別する「認識」という知的いとなみがあって、一つ一つの命名に混乱が生じないようになっているのです。

初めは「メ」「ミミ」「ハナ」とか、「ヤマ」「カワ」「ツキ」「ホシ」といった素朴な命名が行われましたが、それらは、身体の器官や自然現象の中から、認識作用によって、ある選択をして命名したことになります。そしてその命名は素朴なものから体系的な命名にまで及んでいくのです。

認識作用が働いて、ことばによって命名された「もの、こと」は、「他のものとは違う何かの意味」、「もの、ことの本質」を表す概念を形成します。ことばによって表現され、他のものとは違う固有の意味体系を概念といいます。人はことばに含まれる概念を手がかりに、他とのコミュニケーションをはかり自分自身の思考を深めてきました。

つまり、他を区別する認識からことばが生まれ、ことばが概念を生み、概念が思考を深め、思考が新たな認識をもたらす、そしてことばを生むというように、相関的に作用し合って、次々とことばが作られていったと考えられます。

「思考は発言しない言語活動」と言われますが、心の中の対話が、考えを深める内言語(inner speech)の役割も持っています⁽¹⁾。



2. ことばはコミュニケーション・イメージのコピー

ことばをどう使うか、ことばの運用ということについて考えてみましょう。自分の心や頭の中に生まれた思いや考えのことを「イメージ」(image)と呼びます。「イメージ」は明確なものと、そうでないものがありますが、人はその「イメージ」を他に伝えることで、人間的な交流を取り結ぼうとします。その「イメージ」を音声化したものがことばなのです。

しかし「イメージ」と音声化されたことばの間には、どうしても距離があります。イメージ通りにことばで表現することはとても難しいことです。イメージをそっくりそのまま相似的にことばに写し換えることは、不可能に近いでしょう。なぜならイメージは思考作用であって、ことばは思考作用の中の一部の切り取りだからです。イメージと表現の間に介在することばの距離、それを短縮させるために人はさまざまな表現の仕方を考えることになりますが、そのこ

とは、「ことばとは何か」という本質を探ることになるのです。

よくコミュニケーションということがいわれます。コミュニケーションというのは、思想、感情、情報などを伝え合って人間的な関係を取り結ぼうとすることをいいますが、そのためのツールとしてことばがあります。コミュニケーションで伝えるのは、形のあるモノ（具体物）だけとは限りません。心や頭の中にある思いや考えという、形も重みもない「イメージ」といったものも含まれます。ものを手渡すというような単純な行為ではありません⁽²⁾。

そこで「イメージ」を伝えようとするとき、イメージの内容を相手が知覚できる「しるし」に置き換えて渡す、という作業が必要になります。その「しるし」は、ある社会的な取り決めによって定められた記号の一種ですが、実はそれがことばなのです。ですから、コミュニケーションとは自分の心や頭の中に抱えている「イメージ」を、記号ということばの上に相似的にコピーして相手に手渡し、相手の心や頭の中にも共通の「イメージ」を創り出すことなのです。イメージをコピーしてくれる力を持った表現媒体、それがことばなのです。

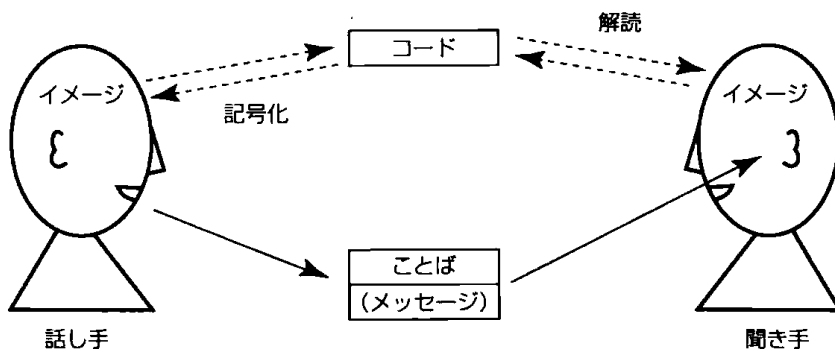
3. ことばを記号化するソフト

私たちは頭の中のイメージを伝えるのに、イメージをことばに置き換えて表現します。ことばはイメージをコピーしてくれる力を持った表現手段だといいましたが、いわばことばは、伝えようとするイメージのシンボルとしての役割を果たしているのです。これが「ことばは記号である」といわれるゆえんです。

シンボルであるということは、話し手と聞き手との間に、本来的な意味と、それに関連する広範な意味とを共通了解事項として持っていなければなりません。その共通了解のための取り決めをコード(code)と呼んでいます。

単語の意味やことばのつながりなどについて、話し手と聞き手との間に、共通したある「きまり」がないと、頭の中のイメージをことばに置き換えることもできないし、ことばという記号を受け取った聞き手も、話し手と共通のイメージを思い描くこともできません。この「きまり」をコードと呼ぶのです。

私たちはコードの存在を意識することがありませんが、外国語を学ぶときに必要になる単語



コード：共通のきまり 社会的な取り決め

図1.1 ことばの記号化

の意味の理解と単語の並べ方のことを思い出してみてください。この2つがコードにあたるもののなのです。

話し手は、伝えたい内容（イメージ）をコードに従って記号化して、ことばに変換します。聞き手は音声として送られてきた記号化されたことばを、コードに従って解読し、イメージを作り上げます。ことばを交わすとき、私たちの頭の中では、イメージから記号へ、記号からイメージへと、コードに従ってすさまじいスピードで転換操作が行われているのです。コードは話し手にとっては記号化装置であり、聞き手にとっては記号解読装置であって、この2種類の働きをする装置は話し手にも聞き手にも備わっているもののなのです。

2 記号としてのことば

私たちは頭の中のイメージを伝えるのに、コードに従って記号化したことばを音声で伝えています。また聞き手は音声で伝えられた記号化されたことばをコードに従って解読し、共通のイメージを作り上げます。

ことばを記号化する、あるいは記号化されたことばを解読するのにコードが必要であり、コードは、記号を扱うときの話し手と聞き手の共通の「きまり」であり、社会的な取り決めとして存在しています。

では、コードによって取り決められる記号とは何なののでしょうか。このことは言語の特質を考えることにつながります。

1. 記号にはどんな働きがあるのか

私たちの身の回りにはいろいろな記号、標識が用いられています。地図に使われているものも、数学で用いられるものも記号です。救急車やパトカーなどのサイレンも記号の一種です。交差点には交通信号機があり、青、黄、赤の3色のライトの点

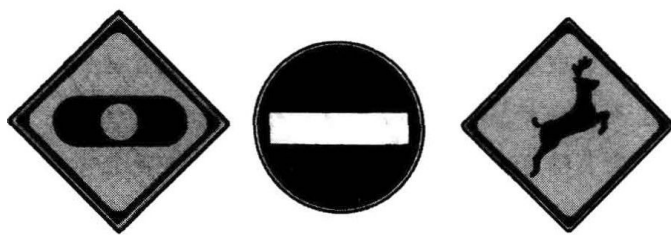


図1.2 交通標識

滅で、「進んでよい」「注意してわたるように」「停止せよ」といった意味内容を表しています。私たちは信号機のライトによる記号表示で、その内容を理解して、道路を横断したり車を運転したりしています。そして信号が伝える意味内容は日本全国どこへ行っても同じです。ある地域では「赤」が「進んでよい」という意味であるなどということはありません。

このことから、記号には伝達内容（メッセージ）を伝えるための記号表現（表示手段）と記号内容（表示内容）があり、その結びつきは社会的な合意にもとづいてはいますが、「赤い信号」と「停

止せよ」という意味内容との間には、何の必然性もないことがわかります。

もう1つ例をあげましょう。私たちは「犬」のことを“inu”と呼んでいます。なぜ「犬」を“inu”と呼ぶのか、その理由づけも動機づけもわかりません。また指示される動物である「犬」自体も、“inu”と呼ばれる動機づけを全く持っていません。ただ私たちが、“inu”と言えば、あるいは英米人が“dog”と言えば、「犬」のことを指しているのです。“inu”という音声による記号が伝える記号表現と記号内容は社会的に取り決められたもので、その記号表現と記号内容の結びつきには、何ら必然的な関係がないのです。

以上のことを整理すると、記号の特質として次の3点をあげることができます。

- ①記号は、記号表現(表すもの)と記号内容(表されるもの)から成り立つ
- ②記号表現と記号内容の関係には、何らの必然性がない
- ③両者の関係、使用法には、社会的な合意がある

2. 言語記号の特徴

ことばは、語であれ文であれ、意味を音で表しているのです。表音化されたことばはやはり記号であると考えられます。記号としてのことばを言語記号と呼びます。

スイスの言語学者ソシュール(Ferdinand de Saussure 1857-1913)は、「言語は記号の体系」であるということを言いました。ソシュールは、言語記号は音声によって、記号表現=シニフィアン(能記)と記号内容=シニフィエ(所記)の2つの面を兼ね備えたものと規定しました。つまり、ことばは記号表現である「音形」と記号内容である「意味」とが組になったものであるということです。

そしてシニフィアンとシニフィエ、両者の関係には、社会的合意はあっても、何ら必然性がなく、また何らの動機づけもありません。表すもの(記号)と表されるもの(指示物)との関係は無契的であり、恣意的なものであるとしたのです。恣意的ということは、両者の関係は勝手気ままに結びついているということです。記号としてのことばの第1の特徴は、「言語記号の恣意性」ということです。

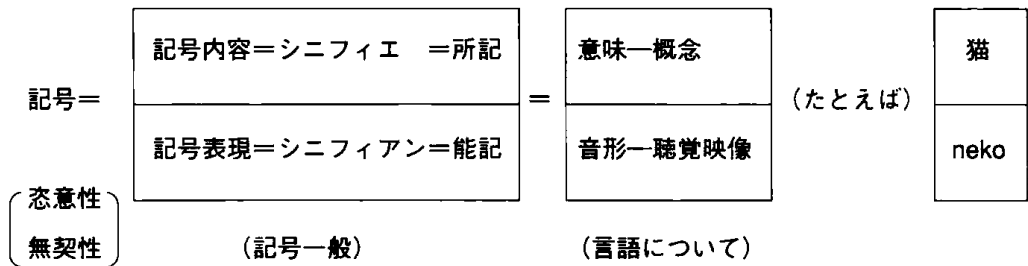
「猫」のことを日本人は“neko”と呼び、アメリカ人は“cat”と呼び、フランス人は“chat”と言います。同一の意味内容「猫」について、各言語の音声表現はさまざまで、共通したものがありません。

ある対象物を表すには、どんな音声言語を用いてもさしつかえありません。言語記号を構成する「意味内容」と「音声表現」の間には、何ら普遍的もしくは論理的な関係はありません。ですから同一の対象物「猫」に対して、各言語は思う気ままに音声表現を割り当てています。「猫」を“neko”または“cat”と呼ばなければならない理由はありません。意味内容と音声表現の結びつきは自由自在、勝手気まま、恣意的に決められているということです。

「猫」のことをなぜ“neko”と呼ぶのか、理由もなければ根拠もありません。無契のことなのです。ですから日本語では「猫」のことは“neko”と呼ぶことになっているんだと、理屈

抜きで覚えるしかなく、推論はききません。

ソシュールは、言語は記号であり、その記号の特質は図のようなものと規定しました⁽³⁾。



ソシュールがあげた言語記号の第2の特徴は、「シニフィアンの線条性」ということです。これは、2つ以上の言語記号が同時に同じ位置を占めることはできないという言語の特徴のことです。言い換えるならば、時間の流れにそって、一語一語順を追って表現されるという特徴があるということです。

道順を教えるとき、「この道をまっすぐ行って、2つ目を右に曲がって……」と、一つ一つ順を追って話します。この場合の表現の仕方は線条的です。ところが、「ちょっと待ってください、地図がありますから」と言って略図を手渡したとしますと、道順を一度に提示したことになり、線条的ではありません。

話しことばでも書きことばでも、あることを伝えるとき、それを一度に全部表現することは不可能です。ことばとして一語ずつ順を追って表現することによってのみ内容を伝えることができるのです。ソシュールはこのことを言語記号の特徴としてあげております。

ところで、ソシュールの理論である「言語記号の恣意性」に反するものも、例外的にあります。一部に記号表現と記号内容との間に必然性のあるものがあります。それは幼児語です。

「父親」を指すのに、/papa/と発音されます。世界中の多くの国が、これに近い発音です。そして「母親」は、/mama/です。多くの国がこの発音におさまってしまいます。[pa] や [ma] の音は、両唇閉鎖音 [p, b, m] が関与し、最大開口度 [a, ɑ, ɔ] のア系ともオ系とも呼ばれる音です。こうした音の発音は、哺乳行動から始まる感覚的な発達によるもので、意味内容と必然的な結びつきで取捨選択されているのです。赤ちゃんは、[i] [u] の音は出しにくく、両唇閉鎖音 [p, b, m]、ア系、オ系の音は感覚的に出せるのです。

このように、恣意性がこわされる事例がいくつかあります。それを有縁性 (motivation) があるといいます。有縁性の高いもの、言語記号の恣意性に反するものは、幼児語の他に、間投詞「ヤッホー」(口蓋化子音＋最大開口度の母音)、擬声語(「カッコー」(日本)、「ククー」(米))や擬態語などのオノマトベがあります。

しかしいずれも、まれなケースです。次のような「ことば遊び」も表現と内容が一致したまれなケースです⁽⁴⁾。



3. 語と語を結びつける「きまり」

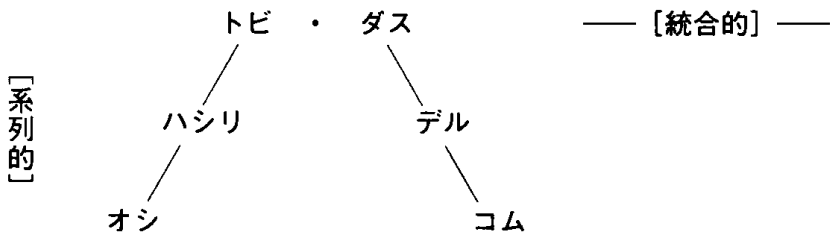
言語記号である「語」は単独でも用いられますが、語と語が組合わさって文として用いられます。その語の組み合わせは、何らかの関係によって成り立っているのです。記号表現（シニフィアン）の線条性の制約によるものです。ことばのつながりで横のつながり、縦のつながりに、あるきまりがあるということです。例えば、「可愛い」と「花」が組み合わさって「可愛い花」という複合した語ができ、そこに「が」と「咲く」が組み合わさると「[可愛い花] + が + [咲く]」という文になります。「可愛い」と「花」との関係は修飾と被修飾の関係があります。「花」+「可愛い」という結びつきにはなりません。「可愛い花」と「咲く」との関係は、主語述語の結びつきです。

このように、何らかの関係で結びついている言語記号の複合したものを、ソシュールはシンタグム (syntagm)「連辞」と呼び、シンタグムを作っている言語記号の間に成り立っている関係をシンタグム関係 (syntagm relation)「統合的關係」と呼びました。シンタグム関係とは、私たちがふつうに考えている語と語の間の文法的な結びつきのことをいいます。

シンタグム関係と対照的な位置にあるのが、パラダイム関係 (paradigmatic relation)「系列的關係」と呼ばれるものです。これは、語の置き換え「置換」という概念を媒介にして成立する関係のことをいいます。

- (a) 可愛い 花 が 咲いた
- (b) 白い 花 が 咲いた
- (c) 赤い 花 が 咲いた

(a) のシンタグム関係は、「可愛い」を「白い」とか「赤い」などに置き換えて (b) (c) としても、(a) と同じタイプのシンタグムとして成立します。ここでは、「可愛い」と置き換えが可能な「白い」や「赤い」がパラダイム関係にあるといいます。このことから言語の構造には、統合性と系列性があるということが理解していただけたと思います。



このように語には、いくつか組み合わせ可能なものがあって、必要に応じて、その中の1つ

を選んで結びつくのです。その結びつきは、次のような関係と考えることができます。

- (a) 統合的關係：語が時間的に続いて横に結合する関係
- (b) 系統的関係：語が同時に縦に対立し選択される関係

「トビ・ダス」は統合的に結合した語ですが、これが実現する背景には「ハシリ」「オシ」、もしくは「デル」「コム」のような結合の候補となる語との間に潜在的な対立関係が隠れているのです⁽⁵⁾。

ことばは、言語記号がただ雑然と集まったものではなく、ある一定の「秩序」にもとづいて集まったもので、「言語は記号の体系である」というソシュールの言語定義を裏付けるものになっています。

4. ことばのきまりと個々人の発話

ソシュールは近代言語学としてのヨーロッパ構造言語学の創設者として知られ、すでに学習してきた言語記号の恣意性、線条性、それに統合性と系列性などの理論で有名ですが、ソシュールを語るとき、次の考え方についても欠かすことはできません。

言語活動は個人個人が行う人間活動ですから、ものの言い方も人さまざまです。その場その時によって、ことばの使い方、発音の仕方、話す態度などに違いが出てきます。たとえば、言い誤り、とちり、ためらい、外部からの雑音、妨害など、偶発的なものによって影響を受けやすいものです。そこでことばのきまりとして、私たちの言語活動の中で、社会的に一定で、話し手と聞き手とに共通する規則性、社会的体系性を持ったものにしようということになり、それを、ソシュールはラングと名付けたのです。一つの言語社会に共通する慣習としての言語体系や、各個人に内在する言語体系のように、制度化され抽象化された部分をラング(langue)というのです。つまり言語体系なり表現体系なりの統一的普遍的な部分を抽象化し、制度化したもので、日本語の場合で考えるならば、日本語を使うための知識・文法が日本語のラングになるわけです。

一方、特定の時間、特定の場面に現れる個人の言語行動は、人さまざまな違いを生じるもので、あることを説明する発話でも、言い方も説明の仕方も、個々人によってみなまちまちです。文章を読むのでも、A君の読みとB君の読みとでは、内容が同じなのにその読み方、表現の仕方がどこか違うということがあります。その個々人の言語行動をパロール(parole)といったのです。

私たちが日本語を話すことができるのは、日本語を使うための知識・文法を知っているからで、いわばこの日本語の文法が日本語のラングであり、この日本語のラングにもとづいて人それぞれに発話していることになり、個々人の発話がパロールということになります。日本語の共通語表現がラングとすれば、日本各地の方言による表現はパロールということになります。

「寿司」のことを共通語で [suɕi] という言い方はラングであり、東北訛りで [çiçi] [susu] と言ったりするのはパロールということになります。